

ビスフェノール A と歯の詰め物に関する日本接着歯学会の見解

日本接着歯学会

はじめに

2008年5月14日付けのNHKニュースは、「輸入品を中心としたほ乳瓶の材料に使われているビスフェノール A (以下 BPA) は、かなり少ない量でも乳幼児に影響を及ぼすため、現在の安全基準を見直す必要があるのではないか」との国立医薬品食品衛生研究所の見解を報じました。本学会は、この報道が「歯の詰め物（樹脂）やその接着材からも BPA が溶出しているのでは？」という国民のみなさんの不安につながらないように、以下の見解を示します。

背景

1996年に、「ムシ歯予防に使用される歯の詰め物から、相当量の BPA 溶出がみられる」と発表した一つの論文が発端となり、ダイオキシンや PCB ほど強い作用はないものの、環境ホルモンの一つとして生物生殖系への影響が疑われる BPA と歯科材料との関連について社会問題となりました。これを受け、国内外の多数の科学者達は発端となった論文内容の真偽を検証し、また各々独自の実験にも着手しました。その結果、米国歯科医師会や日本歯科医学会は、「歯の詰め物等からの BPA 溶出は確認できない」と安全宣言するに至りました。

見解

1. 歯の予防や治療に使われる樹脂（レジン）性の修復材料（詰め物）に、BPA が「そのまま」使われている事実はありません。
2. 一部の歯科材料が、BPA を合成の出発物質として使用してはいるものの、合成後の BPA は原材料とはまったく異なる合成樹脂となり、化学的に強く安定し、口の中で分解することは科学常識上あり得ないものです。
3. 本学会は、日本歯科医学会医療環境問題検討委員会ビスフェノール A 情報収集部会の「歯の詰め物からの BPA の溶出はなく安全である」という宣言と、日本歯科理工学会の調査による安全性確認を支持しています。

参考として

日本歯科理工学会歯科器材調査研究報告委員会報告書：「21世紀における歯科材料の生物学安全性について—とくに内分泌攪乱作用に関連して—」. 歯科材料・器械 第21巻4号 220～260 ページ, 2002年